

みなみ はち まん

南八幡遺跡 6

－第11次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第825集

2004年

福岡市教育委員会

みなみ はち まん

南八幡遺跡 6

－第11次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第825集



調査番号 0228
遺跡略号 MHM-11

2004年

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に務めています。

本書は共同住宅建設に伴い調査を実施した南八幡遺跡第11次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘にあたりご協力とご理解をいただいた大石恵美子氏、有澤建設株式会社をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区元町1丁目29-15において実施した南八幡遺跡第11次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は長野嘉一、中村桂子の補助を得て、上角智希が行った。
3. 本書に掲載した遺物の実測は上角が行った。
4. 本書に掲載した挿図の製図は久家、上角が行った。
5. 本書に掲載した写真は上角が撮影した。
6. 本書にかかわる遺物および記録類の整理は久家春美、篠原明美、黒柳恵美、西嶋奈美が行った。
7. 本書の執筆・編集は上角が行った。
8. 本書で用いる方位は磁北である。
9. 遺構の呼称は堅穴住居跡をSC、溝をSD、土壤をSK、掘立柱建物をSB、その他の遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
10. 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

遺跡名	南八幡遺跡第11次調査	調査番号	O 2 2 8
所在地	博多区元町1丁目29-15	遺跡略号	MHM-11
開発面積	332 m ²	調査面積	177 m ²
調査期間	平成14年8月1日～平成14年8月23日		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
第二章 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
1) 調査経過	8
2) 地形および基本層序	8
3) 概要	8
2. 遺構と遺物	10
1) 竪穴住居跡 (S C)	10
2) 溝 (S D)	11
3) 土壙 (S K)	13
4) 掘立柱建物 (S B)	15
5) 敵状遺構	15
第三章 結語	16

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図	南八幡遺跡位置図 (1/8,000)	4
第3図	昭和初期の地形図 (1/8,000)	5
第4図	第11次調査地点位置図 (1/1,000)	6
第5図	遺構配置図 (1/80)	7
第6図	調査区東壁土層図 (1/50)	8
第7図	S C O 2 実測図 (1/40、1/20)	9
第8図	S C O 2 出土遺物実測図 (1/3)	10
第9図	S D O 1、O 3 実測図 (1/60)	12
第10図	S D O 1、O 3 出土遺物実測図 (1/3)	13
第11図	S K O 4、O 5、O 6 および出土遺物実測図 (1/40、1/3)	14
第12図	S B O 7、O 8 および出土遺物実測図 (1/60、1/3)	15

図 版 目 次

図版1	1. 遺構検出時調査区全景 (南から) 2. 調査区全景 (南東から)
図版2	1. S C O 2 (北西から) 2. S B O 7 (東から)
図版3	1. S K O 4 (東から) 2. S K O 5 (北から)
図版4	出土遺物

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成14年3月14日付けで大石恵美子氏より福岡市教育委員会宛てに、博多区元町1丁目29-15における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号：13-2-934）。これを受けた教育委員会埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である南八幡遺跡に含まれており、周辺の調査において遺構が検出されていることから、同年7月9日に試掘調査を行った。長さ15mのトレンチを開け、現地表下50～80cmで黒色土、60～100cmでローム層を検出、ローム面で遺構（溝・柱穴）を確認した。よって本調査が必用である旨を回答し、その後、両者で協議を行い、平成14年8月1日から1ヶ月の予定で発掘調査を行うことにした。今回の調査は国庫補助事業として行った。

2. 調査体制

調査は以下の組織で行った。

調査委託 大石恵美子

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査総括 文化財部長 堀 徹

埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第二係長 田中壽夫

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

事前審査 田上勇一郎

調査担当 上角智希

発掘作業 井上ヨシ子、岩永崇史、尊田綱代、徳山恵恵、富田猶生、富永美樹、長野嘉一、中村桂子、三浦まり子、宮崎雅秀、山村敬子、芳井宏、渡辺亮志

整理作業 久家春美、黒柳恵美、篠原明美、西嶋奈美

調査にご理解をいただいた施主の大石恵美子氏、事務所の提供をはじめとするご協力をいただいた有澤建設株式会社、地域住民のみなさまに御礼申し上げます。また、今回の調査がつづかなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に従事していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。心から感謝いたします。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

南八幡遺跡は、福岡市の南端に位置し、大野城市、春日市に接している。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に平行してのびる丘陵上に立地している。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤層とし、北西方向から多くの谷が入り込んで、数条の舌状丘陵を形成している。

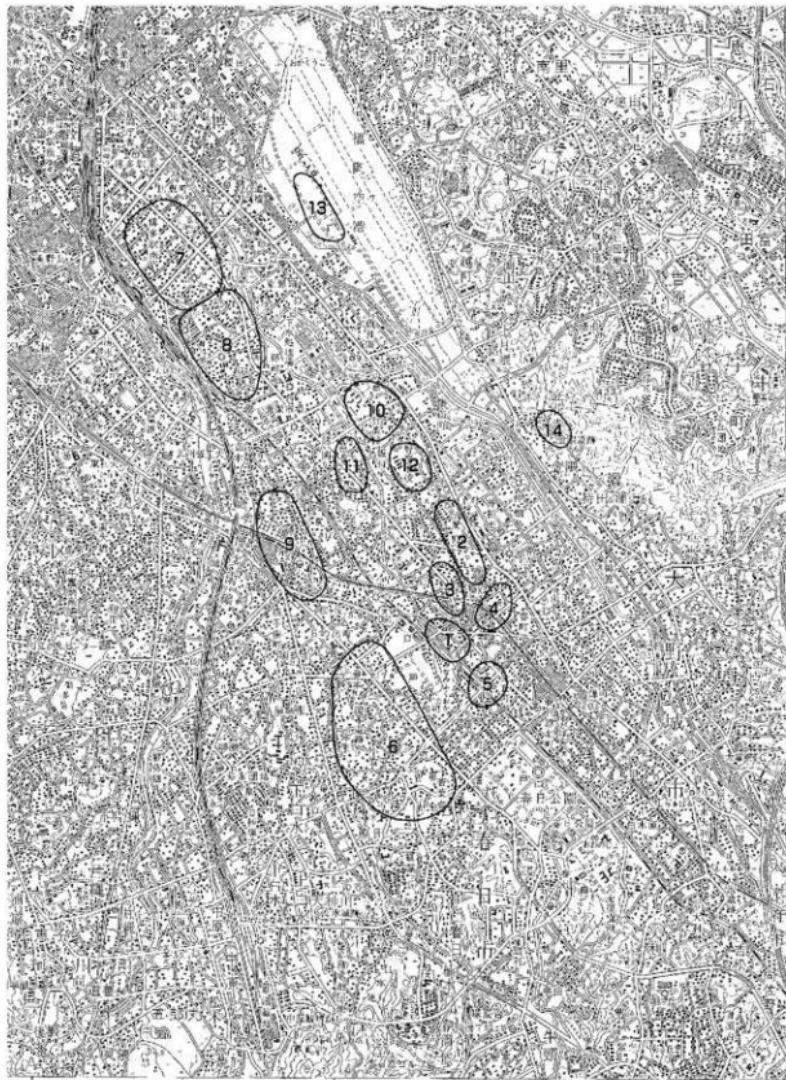
東側の那珂川と西側の御笠川に挟まれた一帯、上流域の春日丘陵から中下流域の沖積平野にかけては、福岡市内でも最も遺跡が集中する地域である。とくに弥生時代の主要遺跡が多く並んでいる。上流部から主な遺跡を挙げていくと、まず、春日丘陵には須玖遺跡群があり、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡や青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡、須玖五反田遺跡が展開している。やや下って下流域には、弥生時代の青銅器の鋳型が出土した井尻B遺跡、繩文晩期の水田で著名な国指定史跡の板付遺跡、比恵、那珂の両遺跡群があり、下流域には中世の博多遺跡群が所在する。

さて、南八幡遺跡が立地する丘陵近辺には幾つかの遺跡が集まっている。舌状丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑駒隈遺跡と呼んでいる(第2図)。昭和初期の地形図(第3図)によると、丘陵に入り込んだ谷部には用水地が築かれており、これらの遺跡を画する地形的特徴が明瞭に表れている。しかし、現在では都市化の進展に伴い、埋め立て・住宅地化が進み以前の地形はほとんど想像できない。

南八幡遺跡については、これまで10次の調査が行われている。その概要について、簡単にまとめておく。旧石器時代の石刃や剥片、繩文時代の土壙(「落とし穴」か)が発見されているが、点的な分布である。弥生時代については、第5次調査で堅穴住居跡1棟が検出された以外は永らく見つかっていなかったが、遺跡南西の丘陵斜面にあたる第9次調査地点で弥生後期の堅穴住居跡8棟・掘立柱建物12棟が見つかり、相当規模の集落が存在したことが明らかとなった。第9次調査2号堅穴住居跡からはガラス玉68個と辰砂粒が出土している。その後、古墳時代後期に集落が営まれる。遺跡南東側の第2・3次調査地点で堅穴住居跡8棟および掘立柱建物1棟が検出された。本遺跡を含む雑駒隈の舌状丘陵上の遺跡群で古墳時代の住居がまとまって検出されるのは稀である。また遺跡北端の第1次調査では古墳時代中期の溝4条が検出されている。

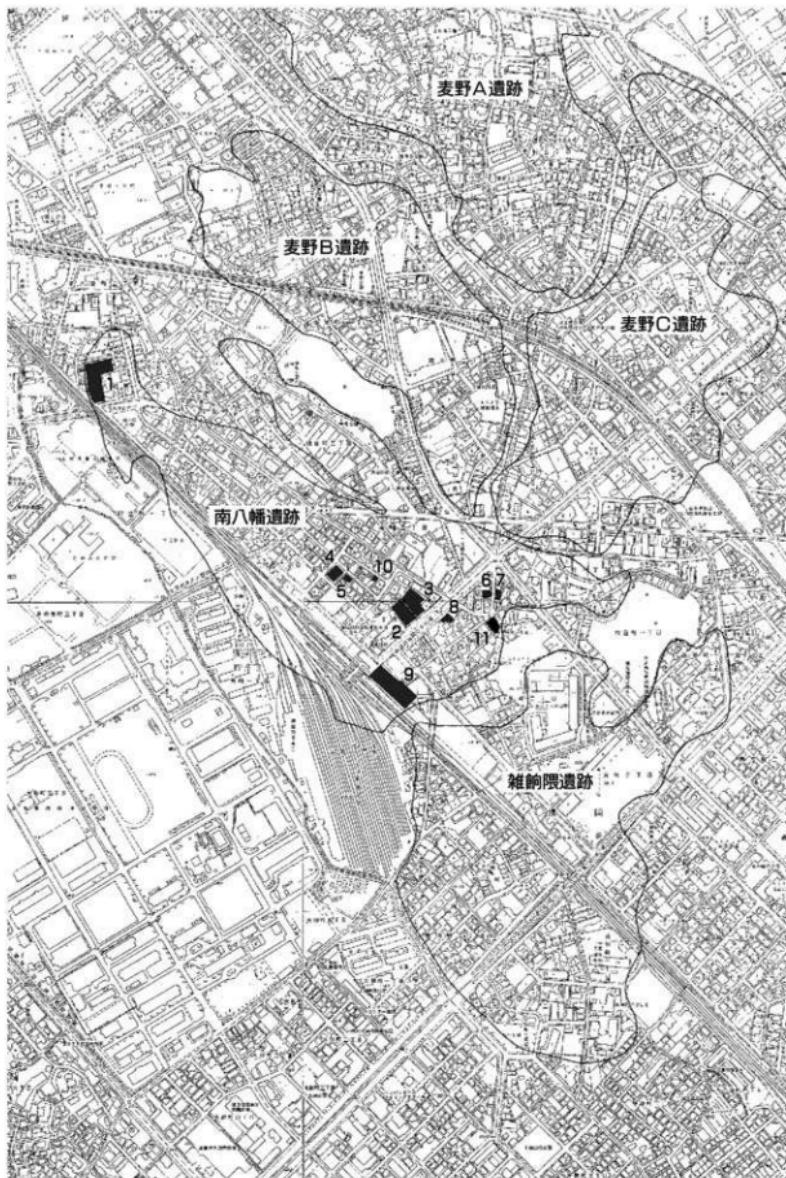
奈良時代、8世紀になると、集落域が大きく広がるようで、ほとんどの調査地点でこの時期の住居が検出されている。本遺跡の該期の堅穴住居跡は壁の高さが70cmを超える深いものが多く見られ、床面で明確な主柱穴を検出できないものもかなり見られる。また、カマドが造りつけられた壁側に深さ5cm、床面から70cmも高いレベルに奥行40cm程度の張り出しがつく事例があり、棚と考えられている(荒牧宏行、1988、「堅穴住居跡の構造について」『南八幡遺跡』福岡市報告書第181集)。余談であるが、南八幡遺跡内の中央部、つまり丘陵頂部であった地点でも試掘調査が行われているが、遺構が見つからない場合が多い。削平を受けて残っていないようである。

平安時代に入ると、集落は消滅してしまう。この現象は雑駒隈丘陵全体に言えることで、奈良時代には丘陵全域に展開していた集落が、9世紀に入ると完全に姿を消すのである。この特異な現象について、大宰府や水城の建設と関連付ける説がある。奈良時代の住居群は数が多いものの食器以外の稀少品や生産関連道具がほとんど出土しないことや、近辺の雑駒隈(ざっしょのくま)の地名が大宰府官人の雑掌が住む場所や食料倉庫の建ち並ぶ場所に由来するという説を挙げて、「大宰府や水城などの国家的施設の建設や修理などに従事させるために集住させた」労働者たちの集落であったと推測されている(例えば、力武卓治、1999、「南八幡遺跡群—第8次調査—」福岡市報告書第602集)。



第1図 周辺の遺跡 (1/50,000)

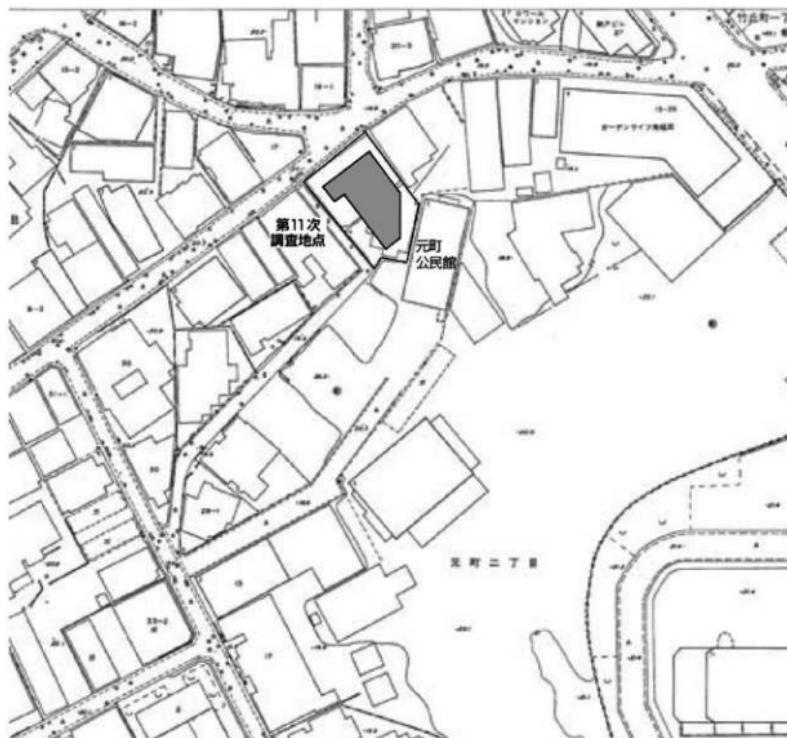
1. 南八幡遺跡 2. 麦野A遺跡 3. 麦野B遺跡 4. 麦野C遺跡 5. 雜鈴隈遺跡 6. 須玖遺跡群
7. 比恵遺跡群 8. 那珂遺跡群 9. 井尻B遺跡 10. 板付遺跡 11. 諸岡B遺跡 12. 高畠遺跡
13. 雀居遺跡 14. 金隈遺跡



第2図 南八幡遺跡位置図 (1/6,000)



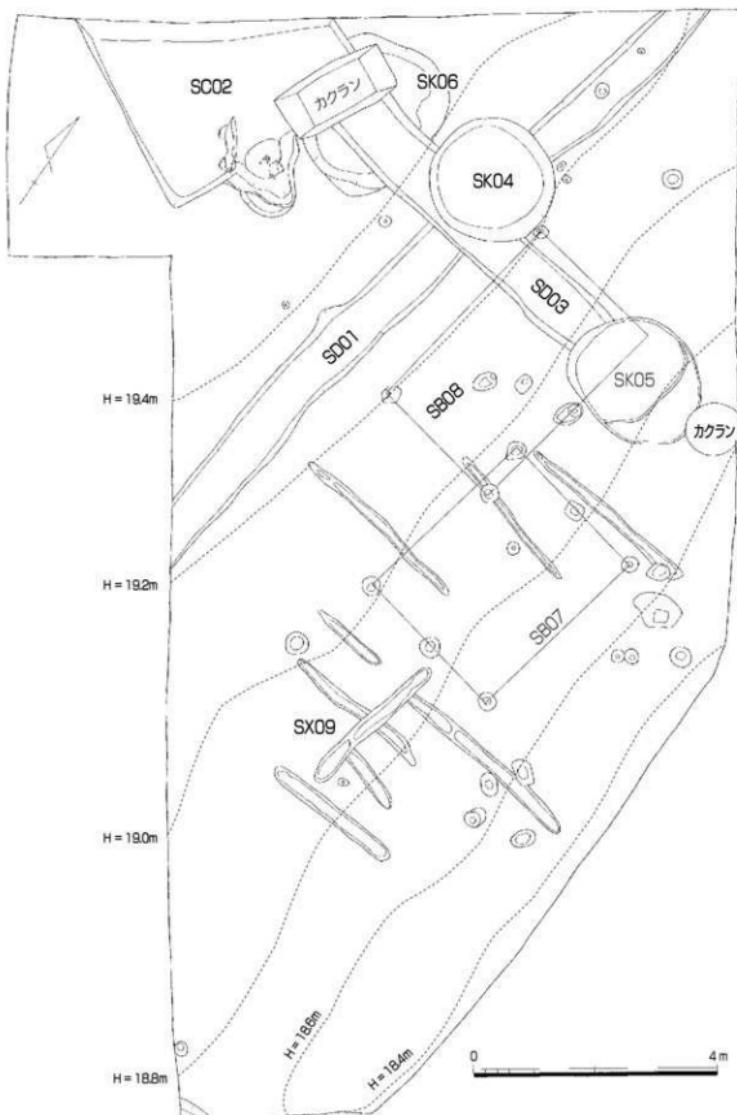
第3図 昭和初期の地形図 (1/6,000)



第4図 第11次調査地点位置図 (1/1,000)

第1表 南八幡遺跡調査一覧表

調査次数	調査番号	所 在 地	調査面積(m ²)	調査担当者	報告書	遺構の時期と性格
第1次	7937	南八幡 2-8-5	680	柳沢・横山	488	古墳中期;溝
第2次	8413	寿町 2-119-1	800	力武・大庭	128	古墳後期;奈良;集落
第3次	8652	寿町 2-4-12	930	田中・荒牧	181	古墳後期;奈良;集落
第4次	9112	寿町 2-86-1・2	247	大庭	277	奈良;集落
第5次	9452	寿町 2-84・85-1	56	白井	441	弥生;竪穴住居跡
第6次	9508	元町 1-19-4	206	加藤隆也	501	奈良;集落
第7次	9560	元町 1-20-2	181	宮井	528	奈良;集落
第8次	9707	元町 1-3-14	114	力武	602	奈良;集落
第9次	9814	寿町 2-9-30	1752	小林	641	弥生後期・奈良;集落
第10次	0040	寿町 2-63	30	佐藤	年報15	近代;溝
第11次	0228	元町 1-29-15	177	上角	825	奈良;集落



第5図 遺構配置図 (1/80)

第二章 調査の記録

1. 調査の概要

1) 調査経過

発掘調査は平成14(2002)年8月1日から同年8月23日にかけて実施した。開発面積332m²のうち、マンション建設により破壊される約200m²を調査の対象とし、まず8月1、2日に重機による表土の剥ぎ取りを行った。そして翌週から人力による遺構検出および遺構精査、記録作業を行った。途中、竪穴住居跡の検出に伴い調査区を拡張するなどして、8月23日器材類の撤収をもって調査を終了した。

2) 地形および基本層序

本調査区は南八幡遺跡が立地する低丘陵の南東端部に位置している。現在では調査区の東側隣地に元町公民館が建てられているが、旧地形図(第3図)によれば、ここに溜め池があったことがわかる。前自治会長さんによれば、30年ほど前に筑紫通りから南に延びてくる幹線道路を建設した際に、池が埋め立てられ、その一部に公民館が設置されたとのことである。

本調査区の遺構検出面は東側の旧溜め池にむかって緩やかに傾斜している(第5図)。標高は最も高い調査区西側の隅で19.5m、池側の低い部分で18.4mを測る。

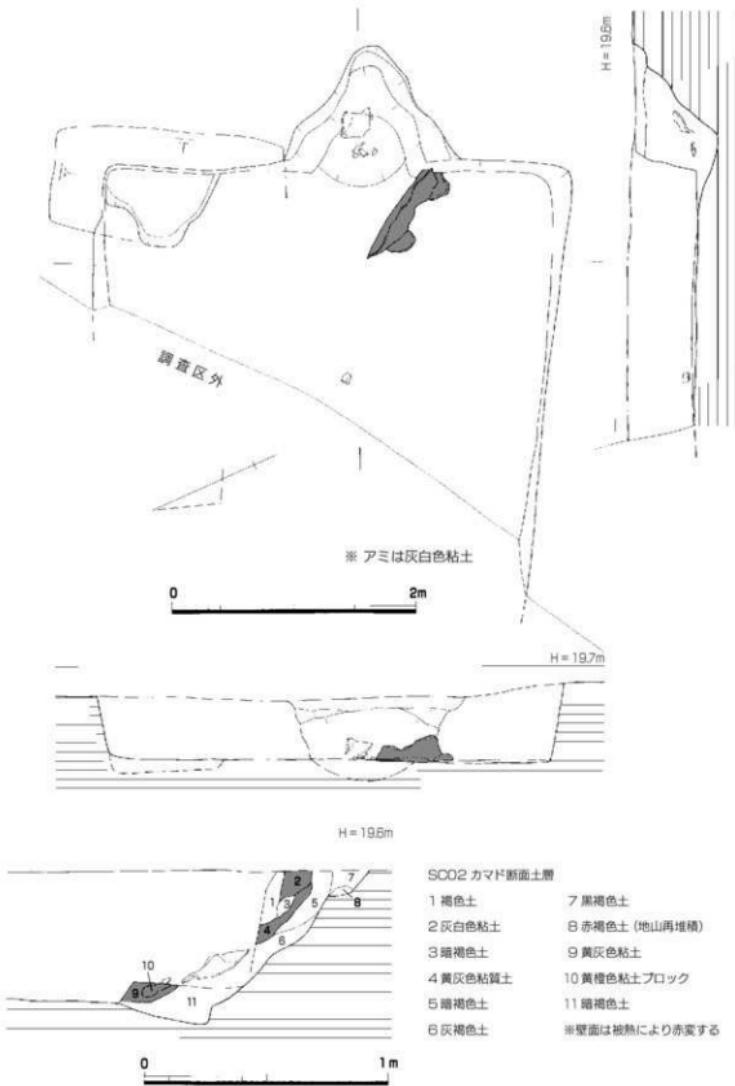
次に、調査区東壁の土層図を第6図に示す。近代以降の盛土(第1層)が1m程度堆積し、その下に暗褐色土(第2層)、黒褐色粘質土(第3層)と堆積している。第2層はおよそ標高19.0m以下の調査区東側に分布し、古代の土師器、須恵器を少量含む。第3層は調査区東隅の標高18.4m以下の部分にだけ分布し、水分を多く含み遺物は包含しない。地山は赤橙色の鳥栖ロームである。

3) 概要

今回の調査では177m²について調査を行い、奈良時代の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物2棟、溝2条、土壤3基、浅い歛状遺構とピット少数を検出した。出土した土器は土師器、須恵器が中心でコンテナ2箱分にとどまる。



第6図 調査区東壁土層図(1/50)



第7図 SC02 実測図 (1/40、1/20)

2. 遺構と遺物

1) 壺穴住居跡 (SC)

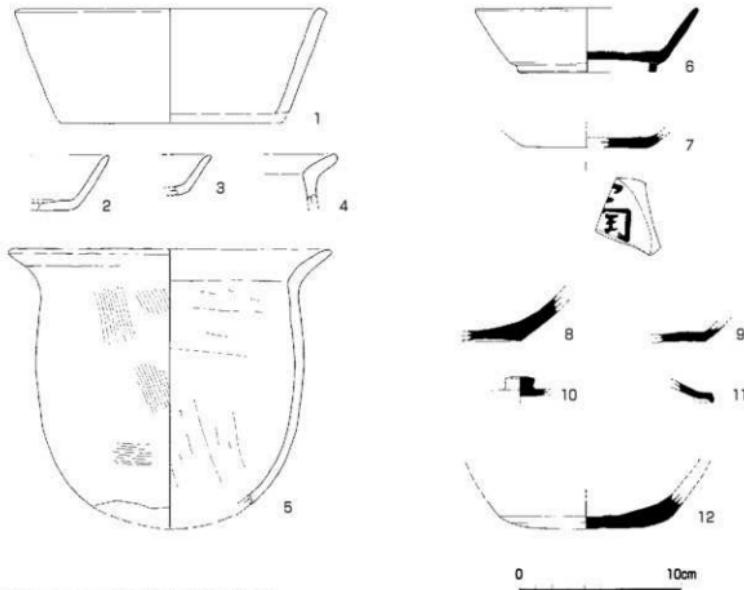
SCO2 (第7図)

調査区北西部で検出した壺穴住居跡である。北西側は調査区外へ延びている。平面プランは方形で、東壁の長さが3.8m、南壁の検出長が3.5mでさらに調査区外へ延びる。検出面からの深さは50~65cmを測り、かなり深く壁面は直に立つ。東北隅は方形の深い擾乱で破壊されていたが、底面付近でコーナーがきちんと検出できた。埋土は黒褐色土に地山ロームの粒子が多く含まれる。床面は平坦で東北隅にだけ浅い貼床が見られた。底面に柱穴が認められなかった。

東壁の中央部にカマドが作りつけられている。カマド内部および前面ではカマドの壁体である灰白色粘土が壊された状態で検出された。図では南側にのみ灰白色粘土を描いているが、実際には北側にも粘土が貼ってあった。しかし、調査時に誤ってはずしてしまった。カマドの両側壁面は熱を受けて赤変し、カマド内から土師器の甕(第8図5)が出土している。出土遺物より、遺構の時期は8世紀中頃~後半に位置づけられる。

出土遺物 (第8図)

1~5は土師器である。1は大型の壺である。復元口径19.0cm、器高7.0cm、底径13.6cmを測る。焼成は甘い。2、3は壺の破片である。いずれも焼きが甘く灰白色を呈する。4は甕の口縁部片である。5は甕である。胴部からほぼ真上に立ち上がり口縁部が外反する。胴部の膨らみが小さい。外面は上半が斜め方向のハケメのちナデ、下半が横ハケ調整、内面は上半を左方向へのケズリ、下半を右方向へのケズリである。



第8図 SCO2 出土遺物実測図 (1/3)

へのケズリで調整する。底部付近に煤が付着し口縁部の一部も2次的に熱を受けて赤変している。口径26.4cm、頸部径21.0cmを測る。カマド内から出土した。

6～12は須恵器である。6は高台をもつ壺である。口径13.6cm、器高3.9cm、底径9.4cm、高台径8.4cmを測る。底部は回転ヘラ切り。焼成は良好で青灰色を呈する。7、9は無高台の壺である。7は復元底径7.8cmを測り、底部に墨書きを有する。8は壺の底部片か。壺にしては体部の器肉が厚い。生焼けで赤褐色を呈する。10は壺蓋の摘みである。摘みはボタン状である。11は壺蓋である。口径端部が短く下に折れる。12は壺の底部片である。回転ヘラケズリを施しており、器肉が厚い。

2) 溝 (SD)

SDO1 (第9図、写真1)

調査区西側を南北に走る溝である。SDO3、SKO4に切られる。幅80cm、深さ10～15cmを測り、長さ約13mにわたって検出した。埋土は黒褐色土で、SDO3埋土とよく似ており、かろうじて切り合ひ関係がみえた。溝はほぼまっすぐで、方向は磁北からわずかに東偏する(N-10°-E)。等高線のコンタと平行しており、地形に沿った方向をとる。出土遺物より、遺構の時期は8世紀中頃に位置づけられる。

出土遺物 (第10図)

13～15は須恵器の壺である。器高は低く、高台は断面四角形で低い。いずれも胎土に粗い砂粒を多く含む。13は口径14.0cm、器高3.7cm、底径10.0cm、高台径9.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り後ナデ。14は復元口径14.0cm、器高3.5cm、底径9.2cm、高台径8.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り。15は口径12.4cm、器高3.9cm、底径9.8cm、高台径9.2cmを測る。16は須恵器の壺の肩部である。外面に格子叩きを施し、内面は同心円文の当て具痕をナデ消す。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

SDO3 (第9図)

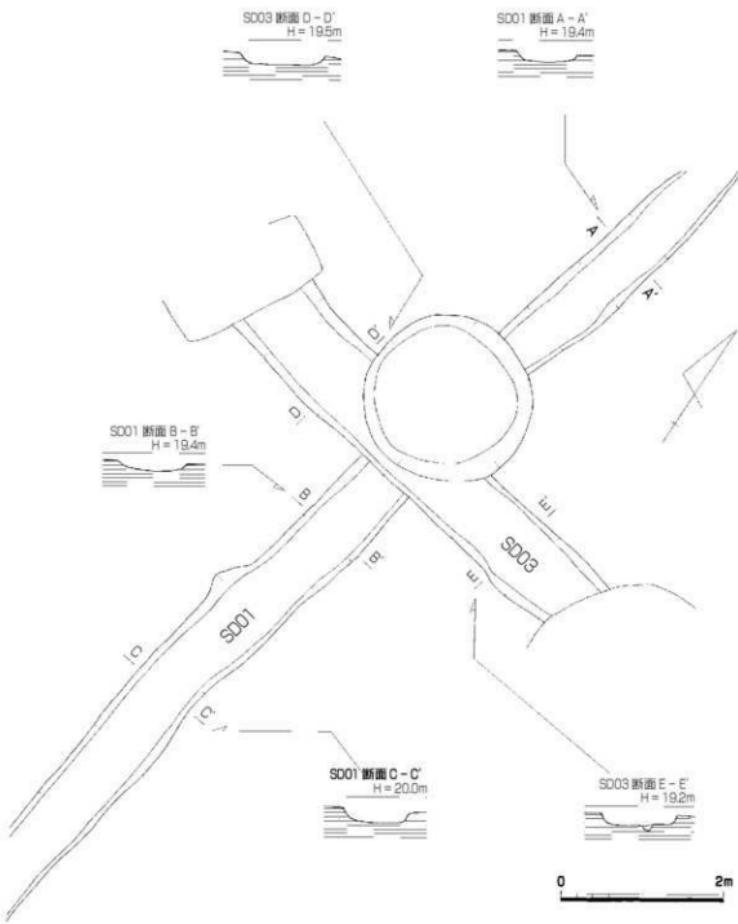
SDO1と直行して東西に走る溝である。幅90cm、深さ15～25cmを測り、約5mにわたって検出した。SDO1、SKO6を切り、SCO2、SKO4、05に切られる。埋土は黒褐色土である。溝の方向はほぼ東西(N-80°-W)を示し、SDO1とはきれいに直行する。出土遺物よりこの遺構は8世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第10図)

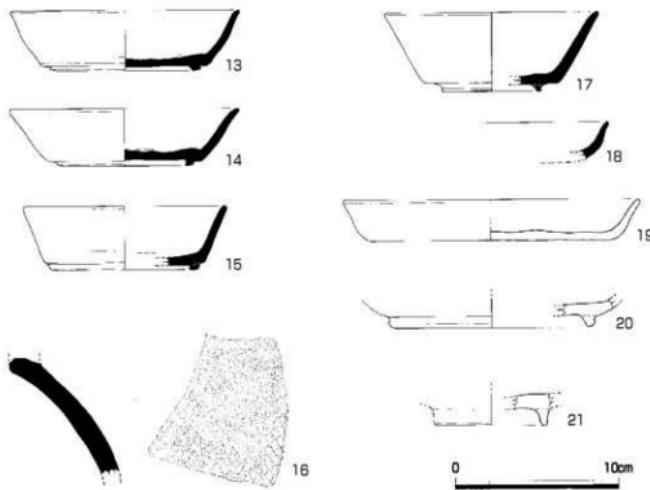
17は須恵器の壺である。復元口径13.0cm、器高4.8cm、底径8.4cm、高台径6.1cmを測る。18は須恵器の皿である。19は土師器の皿である。口径18.0cm、器高2.5cm、底径15.2cmを測る。底は回転ヘラ切りである。20は土師器の皿である。高台径12.6cmを測る。21は土師器の壺の



写真1 SDO1 (南から)



第9図 SD01、03 実測図 (1/60)



第10図 SD01、03出土遺物実測図(1/3)

底部片である。高台径 6.8cm を測る。須恵器よりも土師器の数量が圧倒的に多い。

3) 土壙 (SK)

S K O 4 (第11図)

調査区北西部で検出した円形土壙である。埋土は褐色土で、直径 2.0 m、深さ 20cm を測る。底面に不規則に分布する小ピットは木の根痕である。造構の時期は 8世紀中頃～後半であろう。

22 は土師器の坏である。高台は四角形で低い。23 は土師器で高坏の脚部か。24 は須恵器の壺胴部片である。外面に格子叩き、内面に同心円文の當て具痕が残る。25 は土師器で壺の把手付近である。外面に粗い縦ハケ、内面に横方向のケズリを施す。

S K O 5 (第11図)

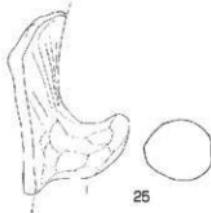
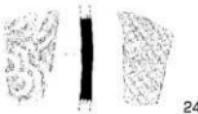
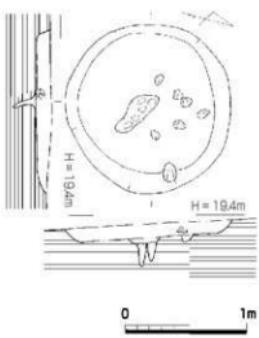
調査区北東部で検出した楕円形土壙である。埋土は黒褐色土で、長軸 2.3 m、短軸 1.9 m、深さ 20cm を測る。底面にいくつかの木の根痕がある。

26 は壺である。底径 14.0cm を測る。底面は 2 孔式で、外面は縦刷毛、内面は上方にケズリ上げる。

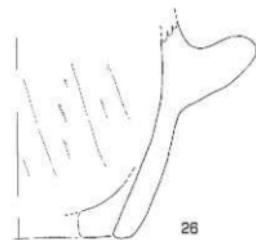
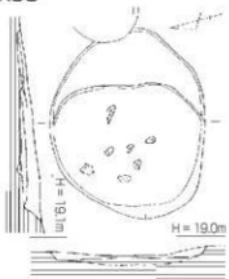
S K O 6 (第11図)

調査区北西部で検出した不整円形の土壙で、SD03 に切られる。埋土は黒色土で、直径約 2.4 m、深さ 40cm を測る。

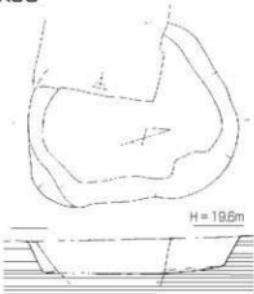
SK04



SK05



SK06



0 10cm

第 11 図 SK04、05、06 および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

4) 挖立柱建物 (S B)

S B 0 7 (第12図)

調査区中央で検出した東西2間(2.7m)、南北1間(3.3m)の掘立柱建物である。主軸方位は磁北からわずかに東偏する(N-12°-E)。柱穴の径は約30cm、深さも大体が30cm程度である。建物の方位はSD01、03と対応するようである。遺物はほとんど出土していないが、溝と同じ8世紀代の遺構であろう。

27は土師器の臺口縁部である。外面は縦ハケのち口縁直下を横ナデ、胸部内面はケズリを施す。外面に煤が付着する。

S B 0 8 (第12図)

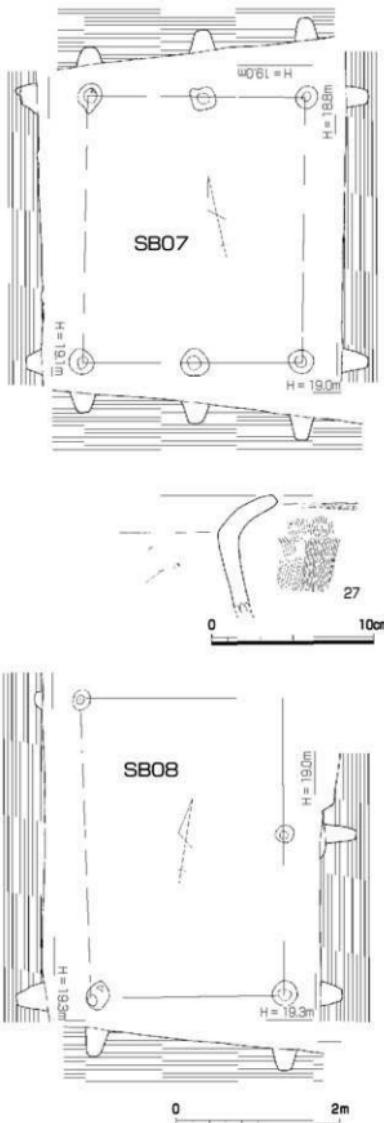
調査区中央で検出した掘立柱建物で、東西2.4m、南北3.6mを測る。北東隅の柱穴はSK06と重なり検出できなかったが、東側の桁には間に1本の支柱を持ち、西側の桁は支柱を挟まない。主軸方位は磁北から若干西偏する(N-12°-W)。SB07、SD03と重複するが、主軸方向は同じである。それらに近い時期の遺構を見てよいであろう。出土遺物はない。

5) 敵状遺構

S X 0 9 (第5図、写真2)

SD01の東側に直交方向に走る敵状遺構である。遺構検出の段階で、プランは不明瞭であるが少し離れて見ると明らかに暗褐色土の部分が筋状に何本も分布しているのがはっきりと認められた。実際に掘ると、非常に浅く底面はでこぼこしている。時期を判断できる遺物は出土していない。

当初、西側の溝SD01が非常にまつすぐのこと、筋状の遺構が溝の東側にのみ分布し溝とは重ならないことから、両者がセットで道路遺構(路面部の波板状



第12図 SB07、08 および出土遺物実測図(1/60, 1/3)

遺構と側溝)になる可能性を少しだけ想定した。しかし、地形的問題ですぐ東に池が位置する緩斜面であること、路面を想定する部分に溝と軸を同一にする掘立柱建物が建つこと、溝・柱穴の深さから原地形はかなり削平されていると見るべきで路面の波板状遺構が残っているとは思えないことから、道路遺構の可能性は棄却した。畠地に由来する畝状遺構ではないかと考えているが、よく分からぬ。



写真2 畝状遺構 SX09 検出状況（東から）

第三章 結語

今回の調査では 177 m²について調査を行い、奈良時代の堅穴住居跡 1 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 2 条、土壙 3 基、浅い畝状遺構とピット少数を検出した。堅穴住居跡は壁面の残存高が 65 cm もあり、主柱穴が床面では検出できない。第 2・3 次調査などで検出されている本遺跡の奈良時代住居によく見られるタイプである。出土した土器は土師器、須恵器を中心でコンテナ 2 箱分にとどまる。墨書き土器が 1 点出土している。奈良時代以外の遺物はないようである。

本調査区は南八幡遺跡がのる丘陵の斜面裾に位置し、東側隣地はごく最近まで池であった。遺構検出面は池に向かってかなりの勾配で落ちていく。遺構の密度は疎であるものの、丘陵のまさに端部まで集落が展開することが分かった。

図 版



発掘作業員のみなさん



1. 遺構検出時調査区全景（南から）



2. 調査区全景（南東から）

図版 2



1. SC02 (北西から)



2. SB07 (東から)



1. SK04 (東から)



2. SK05 (北から)

図版 4



出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	みなみはちまんいせき ろく							
書名	南八幡遺跡6							
副書名	第11次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第825集							
編著者名	上角智希							
編集機関	福岡市教育委員会							
住所	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL. 092-711-4667							
発行年月日	2004年3月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみはちまんいせき 南八幡遺跡 第11次	福岡県 福岡市 博多区元町 1丁目 29-15	40132		33° 22' 23"	130° 27' 52"	2002.08.01 ~ 2002.08.23	200 m ²	共同住宅建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南八幡遺跡 第11次	集落	奈良	堅穴住居跡 掘立柱建物 溝 土壤	1棟 2棟 2条 3基	土師器 須恵器			

南八幡遺跡6

—第11次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第825集

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎ (092) 711-4667

印刷 株式会社 プリテックえんめい

福岡県大牟田市淨真町95-2

☎ (0944) 52-4231